



梅雨前の湿った空気が町中を覆っている。  
昼の時間帯によっては蒸し暑く、夜になれば寒くなる昨今……。  
五月病も乗り越えて、1学期も折り返しだ。  
オレはカズヒロ。中学二年生。  
オレには気になっている人がいる。  
それは隣の家に住む、3歳年上の高校二年生の美空というお姉さんだ。  
何時もオレのことをカズくん、カズくんと、心配して面倒を見てくれる。幼なじみのお姉さんだ。  
オレもミー姉と慕っている。  
自慢の幼なじみのお姉さんで、顔は可愛いが、若干童顔……高校二年と言うが、下手をしたら中学生と見間違えるかも知れない。  
しかし、ミー姉は頭がいい。劣等生のオレなんかと一緒にいてもいいのかと最近、思う。  
ミー姉の将来の夢はキャビンアテンダントだ。  
正直、オレの夢はなんだろう……。  
ミー姉にはカズくんには未だ、将来の夢を決めるには早いと言われている。  
だが、一応は漠然とながら、将来のことは考えていて、ゲームは好きだからゲームクリエイターかな？ とか、安直に何となく、そう思っている。  
そして、大学に行くための下準備として、ミー姉は頭がいいから、オレの勉強の世話を買って出てくれて、見て教えてくれる。  
ミー姉もオレに勉強を教えるのは楽しいらしく、復習にもなるといってはしゃいでいるが、時折、無防備な姿を見せる……幼なじみだから、無防備になるのか……はたまた、狙っているのか……まあ、ミー姉は腹芸が出来ない性格だから、安心してきつての無防備なのだろうが……。  
しかし、オレも、年下でも男だから、性欲はあり、ミー姉の無防備な姿を見たり、ブラちら、パンちらを見て、その晩は一人で自慰をする。  
悪友からＡＶを借りて見ても、頭の中はミー姉のことでいっぱいになる。  
ＡＶ女優がミー姉の顔に脳内変換されるのだ。  
それくらい、ミー姉のことが頭から離れない。  
好き……なんだろうな……。  
そう自分でも思う。  
ミー姉はオレのことをどう思っているのだろう……  
……幼なじみの弟みたいな存在だろうか……。  
恋人とは見てくれないだろうか……。  
もし、告白したら、「冗談でしょ？」と笑われるのか……。  
少し、鬱積した感じはある。  
やっぱり、オレはミー姉のことは好きなのだろう。  
ミー姉は昨日、ウチに来たから、今日は来ないだろうと、オレはヘッドフォンを装着して素人ＡＶを見始めた。  
これは今日、学校で悪友から借りた新作だ。  
素人ＪＫものとは言っても、オレよりも年上なのだから、高校生になれば、そういう子

もクラスにいるのこともあるだろうと、思う。

まあ、中学生でもウリをしていると噂されている女の子もいるのだから、高校生になればクラスに1人とは言わなくても、それなりにいるはずだ。

そんなことを考えていたら、制服姿の女の子が画面に映る。

ミー姉ほど、清楚ではないが、それなりに、清楚感がある女子高生だ。

まあ、このAVは当たりかなと思いながら、どっかのラブホテルの一室でJKが挨拶をしてから、自ら制服姿で乱れていく。

ありきたりとは言え、その映像はそれなりにオレの息子を刺激する。

JKは、制服姿で脚を広げて、スカートをめくり、パンツ越しに自慰をする。その息使いとあえぎ声がヘッドフォンを通して聞こえてくる。

しかし、ミー姉の魅力には敵わない。

裸の男優が画面に入り込んできて、キスし、お互い抱き合いながらJKの陰部などを刺激し始める。

JKの制服の上から、胸を揉む男優……マシュマロのように、弾力がありそうな、胸だ……そして、もう片方の手ではJKの陰部をパンツ越しに撫でまくる。

画面内のJKが快樂の為に、身体をよじる。

JKの微かな喘ぎ声……。

そして、JKの陰部が濡れている、パンツをずらす男優……。

もちろん、画面に映る、双方の陰部にはモザイクがかかっている……それが、想像力をかき立てる。

とは言え、オレは女性の陰部を見たことがないが……。

そして、あえぎ声が大きくなるJK。

「……ミー姉……」

オレは、そのJKをミー姉と重ねた。

あえぎ声が更に大きくなるJK……男優のテクニックに身をゆだねている。眉がハの字型になり、頬が昂揚で赤くなる。息が荒くなり、オスを求めている。

オレの息子が更に元気になり、手を添えて、自分の息子をしごく。

「……ミー姉……」

その途端、右肩をとんとんと叩かれる。

「！！」

心臓が止まるかと思った。

オレは思わず、反射的に後ろを振り向いた……ら、頬に何か刺さった……誰かの人差し指がだった。

「いて！！」

オレは叫んで、痛さで涙目になりながら、後ろを見た……ら、その先にはふくれ面のミー姉がいた。

「ミー姉！！」

オレは慌てた。頬の痛さなど忘れるくらい、オレは慌てた。

AVを見ていたことをミー姉に知られたのもそうだが、AVを見ながら、目の前に居るミー姉の名前を呼んでしまったからだ。

取り返しのつかないことをした……。

オレはそう狼狽しながら、慌ててヘッドフォンを外した。

「ミー姉……いつの間に……」

ミー姉はオレの顔に、自分の顔を近づける。

軽蔑されたのだろうか……オレは気が気でなかった。

「……だって、チャイム押しても返事がないし、ドアの鍵は開いてるし……不用心だよ？」

ふくれっ面のままでミー姉が言う。

「ご、ごめん……」

「まあ、いいんだけど……カズくんもこういうのに興味あるんだ？ もう、そんな歳なんだね……」

ミー姉は今度はオレを探るような目をした。

オレは、ミー姉の名前を口にしてしまったことでオレの動転しているので、とっさに言葉が出なかった。

「……………」

ミー姉も沈黙。

気まずい雰囲気が流れる。

何分……いや、10分はお互い、沈黙していたかもしれない。

時計を見るほどの余裕はなく、緊張と恥ずかしさでオレはそれどころではなかった。

ミー姉がちょっとオレから、顔を離して、口を開いた。

「……まあ、カズくんも……中学生だしね……クラスの男の子達の、そういう会話が耳に入らなかったわけでもないし……」

「……………」

「まあ、うん」

ミー姉はそう言うと、オレに近づいて来た。

また、お互いの顔と顔が接近する。

と同時に、唇と唇を合わせた。

いや、最初、何が起きたのかわからなかった。オレの唇に柔らかい物がふれて、暫くしてから、状況を理解した。

「！？」

オレはミー姉とキスをしている。

あの、ミー姉と……。

一分くらいキスしていただろうか……。

「うん、ファーストキスあげちゃった……カズくん……ってか、小学校の頃、ふざけて、キスしたっけね……カズくんと……」

ミー姉が頬を赤らめながら言う。

そう、ミー姉とは小学校の頃、ふざけてキスはした。

しかし、この年になってのキスはあの当時とは意味合いが違う。

「……オレだって……」

だから、オレはどう反応していいかわからなかった。ただ、この胸の鼓動は……早鳴りする鼓動は嘘ではなく、オレはミー姉のことを異性として認識していて、やはり、好きな

のだと否応なしに認めざるを得ない。

「……カズくんは、私のこと好きなんだよね？」

確認するようにミー姉がうつむきながら言う。

「……うん……」

オレは素直に答えた。

「……………」

ミー姉はうつむきながら、暫く、黙っていたが、ミー姉が口を開いた。

「……お互い……裸になろうか……」

オレはミー姉の言葉が理解できなかった。

「……その……しょ？」

「あ……」

オレは自分の顔が赤くなるのがわかった。ミー姉とするのは夢だったからだ。その夢が叶うのは嬉しいが、いざ、その場面になると、なにをどう行動していいかわからなくなる。

脳が沸騰して身体が熱くなる。そして、それに比例して先程よりも更に鼓動が早くなる。心と身体が持たないのではないくらいだ。

又もや、5分くらいの沈黙……。

我ながら女性であるミー姉をエスコートできないのは男して情けないが、正直、脳が破裂しそうくらい沸騰していた。

「お互い……後ろ向きながら……裸に、なろうか……」

ミー姉は頬をほんのり昂揚させて言った。

「う、うん……」

何とか混乱する頭でミー姉の言葉を理解した。それ程までにオレは狼狽していた。いや、狼狽とかではないかも知れない。状況を未だに信じられない……夢なのではないかとオレは思った。

そして、オレの返事を聞いたミー姉がゆっくりと後ろを向く。

オレも後ろを向く……その気配を察知したのか、ミー姉から衣擦れの音が聞こえてきた。

ミー姉がオレの部屋で裸になる……憧れのミー姉の裸……オレは落ち着いていられなかった。心臓が破裂するかも知れないくらいバクバクと今まで感じたことのないほど、早鳴りしている。

「……………」

オレも、極力、ゆっくりと服を脱ぐ。ミー姉は既に脱ぎ終わっているみたいだ。興奮で息子が痛いくらい、膨張している。

「……カズくん……脱いだ？」

「……うん……」

オレは、言葉を絞り出すようにして言った。

「じゃ、向きあいっこしようか……」

「……うん……」

オレはゆっくりとミー姉の方を向いた。

とうとう、ミー姉の裸が見れる。それは、数年前まで……ミー姉の生理が来るまでは一緒に風呂に入った仲だ。

……見慣れている……。

そう、自分に言い聞かせるが、それは幼なじみの女の子のミー姉であって、女性のミー姉の裸とは意味合いが違う。そう思ってしまうと、この状況は良いのだろうか……。しかし、理性が保てる自信はない。目的は一つになってしまう。……それは、憧れのミー姉と繋がること。そこに集約されるのでは……と思ったし、オレはそれを望んでいる。そのための最初の関門……ミー姉の裸を見ることから始まるが、その段階ですら、オレの心臓は飛び出しそうだ……これからのことを考えたら、オレの身が……心が……心臓が……脳が持つのか心配になる。

「！」

そして、目の前にはミー姉の綺麗な裸体が見えた。

白い肌……。小ぶりの乳房にサーモンピンク色の小さい乳首……。手入れが行き届いた無毛のパイパンのデルタゾーン……。

「……ミー姉……綺麗……」

ありきたりと言えばありきたりだが、それしか言いようのないくらい、ミー姉の裸は綺麗だった。視線が自然と、ミー姉の全身を眺めてしまう。まるで、陶磁器の様に白い肌……それが、ほんのりと上気していて、頬などの所々、ピンク色になっているのが、何とも悩ましい……男性を……見た者を虜にする魔法が女性の裸にはあるのだろうか……。それが、愛しているミー姉だからか？

この瞬間を、あの精密画を描く、レオナルド・ダ・ビンチは絵に写し取れるのだろうか？

まだ、少女のミー姉の魅力を余すところなく、細部まで、白いキャンパスに写し取れるのだろうか？

……オレは、答えはノーだと思った。かの、ダ・ビンチでさえムリだ。それ程までに、ミー姉の裸は整っていて、陳腐な台詞だか神々しいまでに魅力的だった。

「……恥ずかしいね……ちょっと前までは、一緒にお風呂、入ったりしてたのにね……」

ミー姉が恥ずかしそうに微笑んだ。

オレは、吸い寄せられるようにミー姉に近づく。まるで、花に吸い寄せられるミツバチみたいに……。

「……カズくん……顔が、怖いよ？」

ミー姉が苦笑する。少しでも緊張を和らげたいのだろうか……はたまた、本当に怖い顔をしているかも知れない……初めてのことで、緊張しているのか……それよりも先のことを考えているからか……男の性として、女性と繋がるのを渴望するのは当たり前だ。それが、大好きなミー姉なのだから……。

「だって、ミー姉の裸……綺麗なんだもの……」

オレは緊張のため、かすれた声で言った。

「……どこにも逃げないから、落ち着いて、ね」

そう言って、ミー姉もハニカミながらオレに近づき、抱きついてきた。

ふわっと甘いミルクの香りがオレの鼻腔をくすぐる。

それだけで、オレの脳は満足しそうになるが、身体はミー姉を犯したがっていた……要は息子が先程よりも、更に痛いくらい膨らんでいる。

「……おちんちん……パンパンだね……」

抱き合っているミー姉にぶつかっている息子……何だか、オレは恥ずかしくなった。

「ご、ゴメン」

「いいって、いいって……で、私でいいんだよね？ カズくんも初めてでしょ？」

怖ず怖ずとミー姉がオレに聞いた。

「もちろん、初めて……で、初めては、ミー姉じゃないと、やだ」

オレは素直に思いを言った。

初めてはミー姉としたかった。それが、オレが性欲を持つてからの夢だった……その、夢が叶うのがもう少しだ。

いや、初めても、これから先も、ミー姉とずっと、したいと思う。

オレはミー姉なしではいられないと思う。

「初めては私にとって、二回目以降は他の人でもイイの？」

ミー姉が苦笑しながら言う。

「いや、ずっと、ミー姉としたい」

オレは先の自分の脳内の思いを伝えた。

「……よかった……私も、ずっとカズくんをしたい……と言うか、カズくん以外の人としてたくない……から……」

ミー姉が微笑む。

オレは嬉しいと思った。ミー姉もオレと同じなんだ……。

そう思うと、男の悲しい性……先程も思ったが、やはり、身体の関係がないと心底満足できないと思う。性欲は人間の基本的欲求の一つなのだから……人類に雄と雌しかいないのだ、子孫を繁栄させるのは動物として当たり前で、特に好きな女性とは、子どもを作りたい……と思う。それが、自然というか、当たり前のことだろうし、行為をしなければ子どもは作れず、そのために欲求があるのだから……。

「ん、カズくん。カズくん」

もう一度、ついにむようなキスをミー姉がオレにする。

オレは自然とミー姉の胸に手をあてた。

昂揚したミー姉の肌……左の乳房をふれると、ミー姉の鼓動が伝わってくる。

それは、明らかに早かった。

ミー姉も緊張しているんだ……。

そういう思いがして、オレは何だか申し訳ないような、嬉しいような、複雑な気持ちになった。しかし、ミー姉はオレを男として見てくれているから、鼓動が早くなるのだろう。裸だけ見られただけでは、こうはならないはずだと、自分に言い聞かせる。そうしないと、ミー姉に申し訳ない。女性が男の前で裸になるのだから、覚悟がいるだろう……それが、幼なじみであっても……いや、幼なじみだからこそ、緊張しているのか……。

オレはそのようなことを沸騰した頭で考えながら、微乳だが、柔らかなミー姉の乳房を堪能する。

「……こんなこと許すの、カズくんだけなんだから……」

恥ずかしそうにミー姉が言う。オレは天国に行ってしまうのではないかと言うくらい至福の時だった。

「あ、ありがとう……」

だがら、オレはミー姉の胸を堪能した。

微乳だが、形の良く、弾力があり、その双丘には小さくてサーモンピンク色の乳首がある。

本当にミー姉の白くて柔らかい乳房を直に手にしてるという感覚が醒めて欲しくはない夢のようだった。

「カズくん……ベッドに横になって……」

ミー姉が恥ずかしそうに言う。

オレは頷いてから裸の身体をベッドに横たえた。

「立ってる……ね」

ミー姉が恥ずかしそうに言う。

そう、オレの息子は屹立している。

目の前には憧れだったミー姉の裸姿があるのだ。これで立たなかったらオレは恥ずかしくてミー姉とは別の穴……地面の穴に入りたくなるだろう。そして、自ら蓋をして、穴の中で、一人でいなければならないだろう。それくらい恥ずかしいことだと思った。

「またぐね……」

ミー姉が恥ずかしそうにオレの息子の上に中腰になった。

「カズくんは何もしなくていいから。私が動くからね？」

「う、うん」

ミー姉はそう言って、オレの屹立している息子の位置を手を添えて確認しながら、自らの腰を沈めていった。

お互いの秘部がふれたのがわかる。

そこからミー姉は更に腰を下ろし始めた。

いわゆる、騎乗位だ。

初めての行為が騎乗位で良いのかと思う……ここは、男であるオレがエスコートなくて……そう思っている内に、ミー姉が腰を下ろす。

「い……ん……ああ……い……」

ミー姉は初めてだと言っていたから、痛いのだろう。

そして、徐々に腰を下ろして、ゆっくりと最後まで、挿入しようとする。



※有料版は白ぼかしナシのモザイク処理になっております※

ミー姉は……ミー姉の秘部は徐々にオレの息子と合体していき、オレの亀頭がプチプチとミー姉の処女膜を破いていく。

ミー姉の初めてを頂いた。これ以上の満足はない。ミー姉の最初で最後の初めてのことだからだ。

ミー姉のカラダを初めて汚したのだ……後にも先にも、このことは事実だ……オレはそのことに歓喜していたし、オレは息子を通して、ミー姉の優しさを身体で感じたし、この上ない極上の幸せの時だ。

「ん……ああ……入っ、た……」

ミー姉が痛さで顔をしかめながら言った。しかし、その顔は満足している感じもするし、少し、涙目で潤んだ瞳と吐息が悩ましいくらい、淫靡な雰囲気を醸し出している。

「暫く、このままね……未だ、痛いから……」

「う、うん……」

オレは興奮した……陳腐な台詞だが、興奮以上の言葉がみつからない……憧れのミー姉とやっと合体したのだから……。

「やっと、一つになれたね？」

ミー姉が痛さに耐えながら微笑む。その瞳から一滴の涙が零れた。ミー姉も歓喜の涙を流していると思う。

オレにはその顔が女神の微笑みに見えた。女になったミー姉は少し妖艶な女神のようだった。

暫くしてから、ミー姉が、「動くね……」と言って、腰をスライドさせた。

「うん！ ああ！ うあ！ いあ！」

ミー姉は感じているのだろうか？

痛いだけではないだろうか？

顔は苦悶の顔をしている。

「ミー姉、痛いのなら、いいから……」

オレは心配で聞いた。

「お姉さんは、違うの！ 痛いけど、それだけじゃ、ないから」

ミー姉はそう言って腰を動かす。

「あ、あん、あ、い、あ、あ」

ミー姉は腰を動かす度に声を漏らす。

しかし、初めて過ぎてオレは気持ちいいのかわからない。

ただ、暖かいモノに息子が包まれているのだけは理解できる。

それが、ミー姉の優しさから来るモノか、男と女の繋がりで得れるモノかは童貞だったオレにはわからない。

「ああ！ んあ！ んん！ あん！ 嬉しいよ！ カズくんと！ 一つに！ になれる、なんて！ あああ！」

ミー姉はそう言いながらオレに腰をぶつける。

「あ、おちんちん！ カズくんの！ いい！ うん！ ああ！ あああ！」

ミー姉が腰を振るごとに微乳の乳房が微かに揺れる。

「ああ！ んあ！ いあ！ んい！ うう！ あう！」

「あああ！ いいよ！ カズくん！ カズくん！ おちんちん！ いい！」

ミー姉は一生懸命、オレの上で腰を振っている。

その姿が卑猥で何とも言えない優越感を覚えた。

学校のクラスの中でも女性としたことあるヤツはいるみたいだが、ミー姉ほど綺麗で可愛くはないだろう。

しかも、そのミー姉が、自ら腰を振って、オレと繋がっているのだから……。

ミー姉はオレに対しては初めてのことで淫乱素質でもあるのだろうか？

オレにだから……ミー姉もオレのことが好きだったからか？

そう言えば、クラスの奴らにミー姉の写真を見せた時、羨ましがられたのを思い出す……ミー姉の写真を見せた、悪友達は、羨ましがって、冗談でオレを蹴ってきたし、デコピンもされた……あれが、某アーティストのデコピンなら、オレの頭はどうなったか知らないが……だから、これで、優越感がなかったら、男としてどうかと思う。しかも、そのミー姉が自らが腰を振っているのだ。こんなに優越感に浸れた上に、卑猥なことではない。

悪友達に言ったら、半殺しに合うかも知れない……しかし、それくらい、どういうことではないくらいの、ミー姉との至福の時を過ごしていた……。

そして、オレは、ミー姉のその様なことを考えていたら、興奮度が更に上がった。もう、自分の脳が破裂して爆ぜても良いのではないか……そう思うくらいだ。

「ああ！ カズくん！ の！ おちんちん！ 大きく、なってきた！」

優越感と目の前の淫靡なミー姉を見ていて、なおかつ、オレはミー姉の優しいモノに息子を撫でられている感触が気持ちよくて、そろそろ限界を迎えそうだった。

「ミー姉、そろそろ……」

「中で！ いいよ！」

「いや、中は……」

「そう簡単に赤ちゃん、できないらしいし、大丈夫」

そう言いながらミー姉は腰をスライドさせてオレの息子を膣で刺激させる。

「で、でも……」

戸惑うオレだが、息子からの快樂のせいで頭がボーとする。

「いいから、いいから！」

正直、オレは限界だ。

欲望をミー姉に放ちたい。しかも、中で。しかし、子どもが……できるかも知れない。いや、ミー姉との子どもは欲しいが、まだ、年齢的にも早い。

しかし、限界も近い。オレは葛藤しつつ、ミー姉からの快樂に負けた。

「じゃ、出すよ！ ううう！」

「出して！ 中に！ 出して！」

ミー姉が額に汗をかき、瞳を閉じながら、一心不乱に腰を振っている。

「うわ！ で、でるうー！！」

オレは限界を迎えた。そのタイミングで、ミー姉は腰をオレの腰にぶつけた。ミー姉はオレのモノをミー姉の奥に収めたかったのだろう。オレは生理現象で、ミー姉の中に、自分の欲望を放つ。これが、女性とすることなのか……と、思いながら、オレは、ミー姉の子宮に欲望を放出した。

「あああああ……中が……お腹の中が暖かいよ……これがカズくんの精子……なんだね……  
…お腹の中で……いっぱい感じるよ……カズくんのを、感じる……」

暫くオレは射精が続き、ミー姉がピクピクと震える。

オレとミー姉は暫く呼吸も荒く、お互い繋がったままになっていた。

※以後は有料版でお楽しみください※